

人間ベートーヴェンの一断面

——不死の愛人

石倉小三郎

ベートーヴェンの死後秘められたる篋底から五十餘年に亙る辛酸苦難の結實であり、殊に晩年に於ては甥カールに残し置かんが爲に自己の醫療の費まで節して蓄積した數枚の銀行株と共に、三通の自筆の戀文が現はれた。それは激越な調子で書かれて居り、熾くが如き情熱を耀かせて、その凡ての言葉の裏には大きな自信のある、又確に報いられた所のありさうな愛の光彩の閃きを認め得るものであつた。鉛筆の走り書きで又その文章には眞率純善性の滲出をも讀み得るが、例の彼一流の蕪雜な、綴字法などは少しも意として居ない大文字小文字の顛倒の多くあるもので、私共の様な一生をそんな事を教へる事に過して來たものにとつては實に至極厄介な代物である。「不死の愛人」と呼びかけて居るのみで宛名はなし、日附こそあるが年は記してないので、それが發表されるから「不死の愛人への手簡」となつて相繼いで熱心な研究家も出で、それが書かれたと思はれる地へ行つて百餘年を経た今日警察の旅行者名簿まで調べて、克明精細な調査をやつた人もある位であるが今日に至るまで論難批判止まる所を知らず、結局は永遠の謎に終るのであらう。誠にいらぬ御節介の様ではあるが、そんな事を探つて見

たいのが人情の常である。音楽の上に於ては永遠に動きなき鬱然たる大存在であり、時代精神を、宗教的信念を、そして哲學的概念をば、見得る表面から見得ざる藝術分野への移行を以て音楽史上に一新世紀を劃したるかれ其人の人間的な一面を窺ふべき好資料として、自分としては一應考察して見たいと思ふのみである。數多き彼の手簡集の中で、かの有名なハイリゲンシュタットの遺書と共に双壁と稱すべきであり鉛筆の走り書きではあるがさすがに卑俗の調は少しもなく、文辭激越を極むるが中にも心情の溫籍、資性秀邁の徹けき動きをも見るべく、つくらざる字句の中に散文詩の趣があるし、瞬時の感激が音楽偉人の心の中に詩的高翔を起し得た有様を偲ぶに足ると思はれるものである。この手紙はベートーヴェンの愛弟子で祕書役で實務上の事に於ては親身になつて彼を援け率直に彼の天才に渴仰して居たが、偉大な彼と同格に交際し得るだけの才能と理解力とに恵まれて居なかつたので結局はファウストに於けるワーグネルの關係に終つて、甚だ割の合はぬ役割を演じたに止まつたところの、アントーン・シントラーが一八四〇年に發表した彼の最初の傳記に於て世に知られたものである。その後熱心な研究家で卓越せる評傳作家カールリッツシャヤが、そのシントラーの言ふ所に従つて、この神祕な手紙の在り場所は筆筒の中の祕密箱ではなく、ドクトル、ゲーオルク・プロイニング——ベートーヴェンの親友シュテファン・プロイニングの息子でこの巨匠の晩年の狀況を録した「黒西班牙人館の思ひ出」の著者——の手に移つたとその彼の常用の机の中だつたとの事に對し、當のプロイニング氏はある研究者に對し全く反對の事を答へて、自分に譲られた机には祕密抽斗はなかつたと言ふたとの事。又一八六三年シントラーはその問者に普通の衣類筆筒の中であつたが、今はその形さへ記憶がないと答へたとの話。甚だたよりない話であるが、彼の晩年殊に病苦にさいな

まれる様になつてからは、萬事不秩序に亂雜になり、猜疑心も強くなつて居たので、どこか格別な場處に保存されて居たのであらうが、彼の自筆特に中年以後の筆致である事は確かであるらしい。彼の如き大天才が感激陶醉の中に筆をとり、自信と矜持に於ては他人にひけをとらぬその人が、その事の夢と消えた後に於て、悠忽として去り行きし幸福の記念として特に留意して手許に留め置いたと云ふ事實と心情とに對して、云ひ知れぬ懐かしさを禁じ得ないのである。發信されてその人に届かず返つて來たものか、全く出さなかつたものか、それさへ分らなく。

(第一信) 七月六日

私の天使、私のすべて、私の我よ、今日は數語に止めて置きます、しかも君の鉛筆で——漸く明日まで私の室は確保されて居ます。自然が語るところに何故この苦愁があるのだろうか。凡てを放棄する事、相互の犠牲による以外に、我等の愛が存立し得る途があるでせうか。君が全く私のものであり、私が全く君のものである事以外に外に途があると思ひますか？ 美しき自然に眼を放ち給へ、そして來らねばならぬものに就いて君の心情を安らげ給へ——愛は凡てを要求する。それは勿論尤な事だ、私にとつては君なる者が又君にとつては私なるものが實に正に然りである——たゞ君は、私が私の爲にそして君の爲に生きねばならぬといふ事を忘れ勝である様に思へます——我々が一緒になり得るならば、君は私同様此憂苦を感じなくなるでせう。——この旅行は慘憺たるものでした。昨日朝の四時に漸く此處に着いたのですが馬が足りなかつたから、別の道をとつたのでした。何と恐ろしい、道だつた事よ。最後の立て場で、夜行くのは危険だと人は忠告してくれたのでした。それを却て面白い事

に思つたのでしたが、私は誤つて居ました。底知れぬ泥道、裸の街道。私のもつて居たあの馭者がなかつたら途中に野宿せねばならなかつたでせう。エステルハチー候は他の道をとつてしかも八頭の馬で、私が四頭の馬で来たと同じ運命をもつたのでした。——然し私は今は再び些か慰められて居ます、ある苦難を克服し得た時にいつも私があるやうに——。さア早く外的の事から内的の事に行きませう。私達はちき會へるでせうし、今の處、私がかこ數月來私の生活に就いてなしたところの意見を述べる事は出来ません。君に多くを語るべく胸は溢れて居ます——言葉が何等の力をもたないといふ事をさとする瞬間があるものです。快活なれ——私の唯一の信實な戀人、私の凡てであれ、私が君にとつてさうである様に。自餘の事、吾々の爲に何があるべきか、あらねばならぬかは、神が定め送り給ふであらう。汝の貴いルートキウツヒ。

(第二信) 七月六日月曜日夕刻

汝、私の最貴のもの、君は惱んで居る。——今私は手紙が早朝に發信されねばならぬ事を知りました。——月曜——木曜——この地からKへ郵便馬車の出る唯一の日。——惱めるものよ。我ある處に君亦我と共に在り。私と君とで、私が君と共に生活し得るやうにしませう。どんな生活!!! そんな!!!。君なしに——他人の好意に追跡されて——私はその好意に値しても居ないし、値しようとも思つて居ない時に——とてもたまらない。——人の人に對する謙讓。私が私を全宇宙の關聯に於て觀る時、此の我——又人が偉人と稱する人が何であらう。——然しその中に又人間の神性がある。私の初信を多漸く土曜日に受取るであらう事を考へる時、私は泣かざるを得ない。如何に君が私を愛しようとも、何と云ふても、私の方が君をより強く愛して居る。——私から逃げかくれ

し給ふな——さよなら。浴客療養者として私は眠に就かねばなりません。ア、神よ——そんなに近く——そんなに遠く——我々の愛は天の様に堅固ではないでせうか、——蒼穹そのものゝ様に！

(第三信)

七月七日朝

床中既に思ひは君の方に迫つて居ます、私の不死の愛人よ！ 時には嬉しく時には悲しく、運命が我々をきき入れてくれるか如何を待ち受けつゝ。私は君と共にあつて全く生活し得るか然らずんば無になるかです。いや、更に私は、私が君の腕の中に飛び入つて君の心の中に故郷を定めて君をわがものと呼び得るまで、そして私の心が君に包まれて精靈の國へ送らるゝ日の來るまでは、あてもなく遠く方を彷徨ひ廻らうと決心しました。悲しいかなさうあるにちがひない。君こそは君に對するわが眞心を知るが故に、益々落着いて考へる所がなければならぬ。君を外にして、我が心を所有し得るものはありません。——決して——決して。——かほどまで愛して居るものが何故相離れねばならぬか？。そんな事は到底あり得ない。然し私のW(維納)に於ける生活は今も昔も窮乏の生活です——。君の愛こそは私を最幸福な者とも最不幸な者ともなすでせう。今こそ生活の單容と平安とを要求する齡に來て居ると云ふべきでせう。——この事が今の吾々の情況に於て在立し得るであらうか？——天使よ、丁度今私は郵便馬車は毎日出るといふ事を知りましたから、これで筆を止めねばなりません。安靜なれ——我々の存在を靜かに觀察する事によつてのみ、共に生くべき我等の目的は達せられるのです。靜かなれ——われを愛せよ——今日——昨日涙多き如何なる思ひぞ慕はしき君に——君に——私の生命なる——私のすべてのものよ——さよなら——とはに渝らず我を愛し給へ。君の眞愛なるルートウキツヒの最も信實なる胸を誤認し給ふな。

永遠に君の

永遠に私の

永遠に私達の

申すまでもなくペーターヴェンの生涯に關する資料は甚だ貧弱である。彼の誕生日すら明瞭でない。一七七〇年十二月十七日にボンのレミギウス教會で命名を受けて居るから、其數日前であらうと推測され得るだけである。そして其一生は窮乏と受難の連続であつた。若い頃オランダからボンに移り住んで、終には選舉候樂團の指揮長となつた祖父ルイスこそは眞摯謙讓然も敢爲堅忍の力もあり殊に孫の教育には心血を注いで努力したが、彼の父に至つては飲酒癖に墮し輕薄にして心術鄙陋、自己の虚榮と貪欲を充たさんが爲にのみ其子の異材を悪用し鞭撻した。元來生れつきさうであつたのもあらうが、少しく長ずるに及んでは、外憂相繼ぐ諸事の漸積は、その孤獨な天性に拍車をかけ、其性は狷介不羈、行藏は奇激で氣むづかしく猜疑心も強く、激し易く迫り易く、尤も自己の過をさとつて驟然悔悟すれば涙を以て陳謝これつとむる底の純情さを持つては居るが、到底滑脱な社會人たるの能力はなく然も風貌あがらず背も低く常に憂鬱な面色で前屈で歩いて居たと傳へられる彼は、その偉才を高く評價して、あの獨特な眼の力に畏仰推服でもない限り、決して常人に好まるゝ性質ではない。この點、裕福な家庭に生れ鷹揚に貴公子らしく居常暉々たる陽光を發散させつゝ快活で賢明な母の撫育を受け、幼事「天鵝絨と絹物に包まれた美しい歲月」を過し、長じては詩人として臺閣の人として往く所として可ならざるなき所謂

太陽の子ゲーテとは全然對蹠的な命運の下にあつたのである。従つて戀愛生活に於てもゲーテの様な華やかさは想像されないし、ザイフリートの如きは「彼は一度も戀愛を経験した事がなかつた」とまで云つて居るが、これは今は誰も信ずる者はなく、彼の舊友プロイニングは「決して戀愛を知らないのではなく、否寧ろ全身を以て狂熱的にこれに没入した。そしてその相手は皆貴族生れの美人で才媛で、時には多くの美男も敵し得ぬ程度に成功したと云つて居るし、又彼の三十歳時代に主治醫であつたバルトリンは所謂「炎の人」として數名の女性の名を擧げて居る。何れにしても堅く獨りで胸に秘めて、想出話として以外は決して人に語つた事はなく、常に人に覺られぬ様細心の注意を拂つて居たらしい。

そこでこの主題の手紙の主は誰かといふ問題になるのであるが、年代順に考へて來ると「一七九五年マグダレナ・ウキルマンといふのが第一に現はれて來る。當時評判の歌手でベイトーヴェンはボン時代に彼女を愛し正式に申込までしたとセーヤーは云つて居るが、彼女の方では彼が「醜男であり半狂人であるから」と云つて拒絶したとも云はれ又當時は温泉療養などの餘裕もなし其證據もないから問題にならない。最初の傳記發表者シントラーは伯爵令嬢ジュリエッタ・ギツチアルデイであるとなしノールも亦これに和して居るが、この説も亦根據薄弱である。といふ事は、彼が第一版に於ては一八〇六年であるとなし、然るに彼女は既に一八〇三年秋にガレンベルク伯と結婚して居る事が明になつたので、改めて一八〇三年と訂正して居るなど輕率な所もあるし、殊にこの年の七月六日は月曜日に當らず又ベイトーヴェンはその頃維納郊外に居た事も明かであるので今日は是又問題になり得ない。この婦人は今残つて居る寫眞によつても、貴族らしい美しさを持つて居るし才能豊かな人であつたが

相當コケットであつたらしく、たゞ一時の「炎」の一人に過ぎなかつたと見て差支ないらしい。七月六日の月曜日に當る年を調べて見ると一八〇一年、七年、十二年、十八年となる次第であるが、一八〇一年に彼が親友ウエーゲラーに送つた手紙に「愛すべき魅力ある少女」といふ言葉があるので一應考慮はされるが、この年には維納に近いヘッツェンドルフに居て「橄欖山上の基督」の作曲に専念し、且縷々その病苦を訴へて居るが、浴療の事には一語も及んで居ないから是又問題にならない。確實性のあるは一八〇七年と十二年であるが、七年は彼の親友で弟子で眞の好意ある保護者であつたエステルハツキー侯への書信によれば「ハ長調ミサ曲」の創作に熱中して居て浴療に就ては一語もふれて居ない。そこで推測も研究も凡て一八一二年に集中するわけである。此年にはポヘミヤ州の温泉場テプリッツに居た事は文獻に残つて居り、殊にゲーテの日記に明にベイトーヴェンとの會見の事が記されて居るので、事は確實で動かざる所である。ゲーテとの會見の事はベイトーヴェン研究に於て重要性をもつて居るし、その連絡者は當時の文學藝術界に於て問題の人ベッティーナである所から、種々話題も提供されて居るのであるが今はそのには觸れない。才はじけた空想的な些か無責任な文學婦人、グンドルフに従へば女性小塵、ベツカーによれば不思議な女豫言者であるところの才媛ベッティーナの事であるから、諸の事件を思の儘に飾り立て仰山に潤色したであらう事も考へられるが、殊にかのテプリッツに於ける逸話——ゲーテと共に散策の途次、王侯の横列をなして來るのに出遇ひ、これに對してゲーテが脱帽敬禮をなしたのに反し彼はその列を横ぎつて歩いて行つたといふ——この話はロマン・ロランによつても採録され、確實性あるやうでもあるが、その出處がベッティーナの手簡にのみありとすれば、輕々には信じ難く、結局は讀む人の心に任せ推測に止めざ

るを得ない事、此「不死の愛人」と同種の問題である。但し人間ベートーヴェンを考察する爲には充分慎重に取扱はれてよいと思ふ。

愈々本題の論争に入るとすると、結局はラ・マラーとトマス・サンガリー兩氏のそれに歸趨する。前者は本名マリー・リプジウス前世紀末より今世紀にかけて音楽の史的研究に於て逸すべからざる巾幗の秀である。女史は一九〇八年のノイエ・ルンドシャヴの誌上に精細な研究を以て名宛の主はベートーヴェンの多才な女弟子であつた伯爵令嬢テレーゼ・ブルンスウキツクなりと發表せるに對し、後者は同年單行小冊子二冊を以て伯林の歌手マリト・ゼーバルトであるとし、一論一駁歸着する所を知らぬ次第である。結局はこの二人の女性を心に描き其環境や行藏の上の諸事實を尋釋して夫々其信ずる所好む所に從つて定めて戴きたいのであつて自分としては、固より人に教へ強ゆる所あらんとするものではない。アマリエも貴族ではないが教養ある上流家庭の出で、音楽文學の素養も深く、其漆黒な眼と高尚な舉措とによつて、マリア・フォン・ヴェーバーに大きな印象を残したと云ふ傳へもある。

ラ・マラーはどこまでも一八〇七年説を持し、従てその温泉地もテブリッツではなく、匈牙利の某地であり、書簡中の瓦地とはブルンスウキツク家の莊園コロンバであると云ひ、それが爲にはテレーゼ手記のメモを例證に引き、しかもその日附に思ひ違があるとまで論斷して居る。攻研推論としては少しく大膽に過ぎるやに思はれもするがベートーヴェン研究の標準的好著たるセーヤーのそれに従ひ、これに細論を加へてブルンスウキツクに定

めたいとする點には贅意を表せざるを得ない氣持もある。片や、アマールエの主張者サンガリーはその當時の警察届出の浴客名簿まで調べて博引旁證至らざるなく、その中にはゲーテ及その夫人その他ベッティーナ夫妻（既にアルニムと結婚して居る）の滞在届出もあり、前記の逸話や兩雄會見等副産的興味も手傳つて、遽にすつるに忍び難い。客觀的事實との比照適合の精度に至つてはむしろ前者に勝るもの多々ある。茲にその勞に對して敬意を表する次第である。

テレーゼ・フォン・ブルンスウキツクは才色兼備の、殊に音樂繪畫語學に於て比類なき豊かな才能に恵まれ、居常舉止端正、しかも快活で愛嬌に富み嫂^{スッ}娣^トとした優雅な體質、そして貴族出にふさはしい高清溫潤、其在る處常に芝蘭の香りを漂はせて居たといふ。六歳既に管絃樂伴奏の協奏曲^{コンチェルト}を奏して匈牙利好樂者流を驚かせたといふ。姉ヨゼフィネ、弟伯爵家の當主フランツ——後にこの樂聖のよき友となり有力な援助者となつた——と共に、その居邸マルトンウツザールにプラトーン的小理想國家を作り、高き理想に憧れて嬉遊し、後年此ロマンティックな感激を追憶して、一生の最幸福の時期となせりといふ。彼女がこの樂聖の教を受けるに至つたのは廿四歳の時（彼より五歳年少であつた）その折、ある人が母者人に「ベ氏はたゞ御出を願ふ位では到底これを動かす事は出来ませぬ。閣下夫人がわざ／＼足を運ばれてペテルブラツクの狭い螺旋を三階上の勞を意とせぬだけの雅量を示されるならば或は成功するかも知れませぬ」と云ふたその言葉に従つて「ベ氏のソナタを學校通ひの女生徒の様に小脇にかゝへて私共はいそ／＼と上つて行つた。不朽の偉人、そして愛すべきベートルヴェンは出来るだけの好意と鄭重とを以て受入れた」そこで彼女は立派に演奏し、それ以來彼女の維納滯在中毎日來て彼女が

「從來指を高く上げ平に保つ様に教へられて居た指使ひを、低く保つてまげる様に直す爲に一時間の處を五時間に及んで共に倦む所を知らなかつた。自分達は飢を少しも感じなかつたが母君はお困りになつたらしい」これはテレーゼ手記の一節。ラ・マラーが苦辛して入手し得たものであるといふ。この深厚にして情味饒かな友情は一生を通して渝らず、彼も亦屢伯爵の館マルトンワザールに赴き、所謂プラトーン小理想國の一員となり「菩提樹にとりまかれた小亭に圓座し、その周圍の木に會員それぞれの名が與へられ、萬一その人が缺席の折にはその象徴なる木々と心ゆくばかり語り、「お早よう」と云つた後で、説明してほしい條々を木に語れば、木は必ず答へて知らざる所はなかつた。」

この清淡な友情がいつ戀愛の情熱に變じたか。それが又進んで婚約の域にまで行つたものか如何かは確證するよすがも必要もないであらうが、彼自身の手記によると。「彼女の心の奥は純善そのものである。彼女は低きもの、卑しきもの、月並なものを遠ざける事を常に知つて居る。身分の尊さと人格の尊さを共に同じく潰す事が無い。常住渝る事なく人間の中の神的なものを尊敬する。明かに義務を認識して、それは彼女自身に於ては法律になつて居る。貴い人間愛に充されて、眞なるもの自然的なるものにのみ心を傾注する。庸劣陳套、偏狹、虚構を忌み、修養反省止む所を知らずと賞讃して居るが、これは彼自身の人生觀の眞髓に徹したもので、それこそ自己の全確信を説けるものであり、ある程度彼自身を目前に見ると云ふても過言ではあるまい。セーヤーが彼女こそ「不死の愛人」でなければならぬと斷定したのも確かに首肯し得らるる所であるが更にマラーは捷まぬ努力によつて彼女の近親知友の證言を提示し、始めはそれ等の人々はこの關係を隠蔽せんとして居たが、面紗がはが

れた今は永い沈黙を破つて祕事を明かさんとするものであるとして、彼女の姪伯爵夫人ダイムその妹及家の友カ
ロリーネ・ラングイデルの名を擧げて居る。然しラ・マラーの熱心なる穿鑿にも拘らず他には同家の人のこれ
を確言する者もない由であり、更にこの手簡は一八四〇年まではシントラーの手に全く秘められて居たのでブル
ンスウキツク家に知られては居なかつたといふ事實と照合すれば、如上二三者の證言も確たる證憑にはなり得な
い。又その時期としては七年よりは十二年の方が好都合なので、彼のプラーク滞在を以てテレーゼとの會合に適
從せしめる説もあるが、爰には凡て省略されてよからう。何れにせよその好尙の一致、雙方の理解尊敬等から婚
約まで進む可能性も考へられるが、その實現せざりしは原因は結局身分の相違に歸するのであらう。彼が自ら任
ずる事高きに拘らず、謙抑自省もあり普通の世間的事理の一面を充分に考察するだけの餘裕を持つて居た事の立
證ともなり彼の性格解明の一助としたく思ふのである。テレーゼの母夫人は自分も貴族の出であり、ブルンスウ
キツク家は祖先に遡ればハインリッヒ獅子王まで達するといふ名家であるのに、その頃は家道振はず。(ナポレ
オン戦争による無惨な敗戦後自由解放戦争によつて復活の閃きを示しつゝも次に來るべき革命混亂の戸口に立
つて居た時で國家財政破綻の爲通貨は五分ノ一に下つて居た由。)誇り高く偏執強く早く寡婦となつて益狭量を
募らせて居た老伯爵夫人は、天才を認められて居た其頃は名聲全歐洲に錯々たりしとは云へ、無冠の一音楽家を
如何に見たらうかは故ら強調する要もあるまい。門地本位の結婚によつて姉嬢を不幸に陥れた事は事實であり、
それかあらぬか、當のテレーゼは結婚も斷念し墮太利帝國に於ける始めての孤兒院の創始者として一八二九年以
來世に奉仕し、八十六歳の壽を全うして永眠せる際は彼女のそれを範として出來た孤兒院救援事業は千を以て數へ

るに至つたといふ。彼ベートーヴェンが益強く深く彼をとりまく孤獨の中に烈々の信念を以て「四海兄弟相愛」の歡喜を望念した第九交響樂の理想は、彼女によつて實現されたとも云ひ得べく、後我の奉仕によつて、悲運の孤兒等と地上の悲みを分ち、天上の悦を共に成し終ふせた彼女の崇高なる精神を今纔に残つて居る一葉の彼女のその當時の肖像に思ひ偲ぶのみであるが、この事は結婚不成立といふ事が、單に双方當事者の爲のみならず、廣く、世の爲人の爲の幸福の源となり得たであらう事の、藝術史上はた又人生史上の稀有著大なしかもゆかしき一事例として銘記されてよからうと思ふのである。

アマリーエ・ゼーバルトを以てこの不死の愛人に擬せんとする説。この方が客觀的事實との適合性は寧ろ強い様である。貴族出ではないが伯林の良家庭の出である(後年結婚に際しては普露西王女より祝狀を受けて居る)。音樂に就てはツエルター(ゲーテの音樂顧問格であつた)の弟子で一家凡てが伯林ジングアカデミー(今日迄繼續せる獨逸第一の權威ある合唱團體)の會員であり、芳紀廿五、既に相當の判斷力もあり、教養深く才色双絶、彼女の在る處その周圍に對して人間性を引上げる力を以て居たといふ。その前年十一年にテプリッツで交際を結び翌十二年彼がテプリッツに來た時、ゼーバルト家の者がカールスバートに居る事を知り得、そこで問題の手紙を認めたのだと推測せられる。更に九月に人つてからアマリーエに送つた手紙が數通あるが、いつもの激越な調子に似ず、極めてやさしい、情味溢れたしかもフォーマルに充ちたものである。但しこの後のものが言葉も丁寧で命令的でもなく、*du* を使つて居ないので、この兩者の矛盾が問題とされる譯であるが、そこでこの手紙は全く發信されなかつた。永久な心の祕密として記念として篋底に秘めて置いたといふ推測が確實性を強めて來る。彼

の性格が誇り高い、人を人とも思はぬかの様に取沙汰されて居る一方に、これだけの遠慮と抑制とを具備して居たといふ事實を以て、彼の性格批判も再検討されねばならぬのではあるまいか。ゲーテとの關係なども改めて見直されてよいと思ふ。一八一六年の彼の手簡の一節に「五年前自分は一人の淑女を知つた。彼女との永久の結合は自分に人生の最大幸福を齎したかも知れないが、それは不可能であつた。然しその思ひは今尙その日の如く保持して居る。而して遂に公然の發表には至らなかつた」とあるのでサン・ガリーはゼーバルト説の根據を強く爰に求めて居る。然らば何が彼をしてかばかり抑制せしめたか。外的には宗教の相違がある。(アマリーエは新教彼は舊教で此事は當時に於ては有力な障害となり得た)。然しより重要な内的原因は益悪化する癲疾、從て彼が信條とする力に對する信念の喪失であらう。アマリーエはその後司法官クラウゼと結婚し寡婦となつてからも周囲の愛敬を聚めて居たといふ。六十歳で世を終つた。彼女の肖像は残つて居ないが、唯一つ残つて居るボンに遊學中の甥に與へたといふフアクシミールによると、輕快達筆で極めて高雅な、其種のものゝ中余が最も好むところの一である。

「月光曲」を彼はギツチアルデイに獻呈し、ブルンスウィックには「嬰へ長調ソナタ」を獻じて居るが、ゼーバルトには何も獻じて居ない。この事實によつてこの問題を解決せんとする事も一應考へられもするが、愛情の厚薄を獻呈された曲の價值によつて定めるといふ事も、何やら懸賞めいて異なるものとも思はれる。月光曲は「作品廿七番二號嬰へ短調ソナタ」として發表されたもので、月光といふ名はさう深い機縁のあるものではなく、レルシュタープが「第一樂章が瑞西四林湖の月夜の風光を忍ばしむる」と云つた事からであり、勿論名曲の一つで

はあるが、彼自身が呼んだわけではない。彼自身が「人はこの曲を盛にもてはやすが、自分は何もつとよいものを書いて居る」と言明して居る事は確であり、否定すべからざる事實である。テレーゼに獻じた「嬰へ長調ソナタ」（作品七十八）は、前者に比しては小さく、二樂章よりなる小曲であるが、第二樂章の格別な優雅と轉調に富み建築的彩華の光あふるゝ曲風と、後に續いて來る抑へられた情熱の力強さを併せ考ふる時、これを月光曲に比して價値なしとするは正しい批判でないといふのが批評家の通説である様である。ある人の云つた様にエチュードに過ぎぬなど云ふのは酷評であらう。一體ベートーヴェンの獻呈のあとを辿つて見ると意義多き力強き大曲は決して婦人には捧げて居ない。婦人に捧げて居る曲は必ずやさしい優麗な曲のみである。

標準的モーツアルト傳の著者オットヤーンが當のジュリエッタから聞いたといふ所によると、始めベートーヴェンはジュリエッタに對し月光曲ではなく「ト長調ロンド」（作品五一ノ二號）を捧げたのであつたが、その後彼が世話になり、又親しみも持つて居たりヒノフスキー公爵の妹女伯爵ヘンリエツテに何か捧げなければならなくなつたので、これを取り戻してヘンリエツテに捧げたので彼女にはその代りに月光曲が捧げられたのであるとの事。このロンドは甘い柔かい美しさの溢れた曲で、女性に捧げるには相應しい曲であるが藝術的價値からすれば月光曲の方が遙かに勝れて居る事は申すまでもない。優秀な作品を代りに送られたのだから悦んでもよいかも知れないが、何かの都合か思ひつきかで一度送られたものを取り戻されるといふ事を當のジュリエッタは何と感じたか、何れにせよ眞に熱愛する戀人に對する所爲とは考へられない。獻呈の事實と厚薄とをもつてこの戀人決定の標準とする事は當らないであらう。

サンガリーは更に一八一六年に發表された歌謡曲集「遠方にある戀人に」と題するものこそは、前述手記の通り「五年前の樂しかりし思出鮮かに今も尙その日の如く新しい」その情熱の所産であると主張し「遠き戀人」はその儘「不死の愛人」と書きかへらるべきであると説いて居る。この曲は聲樂曲の少い彼の作品中の壓巻といふべきものである。

終にこの時期の作に係る第七第八兩交響曲に就て一言申添へて置きたい。この二つは正に雙生兒とも云ふべきもので、そのスケッチは一八〇九年に始められ十二年に完成され、十三年十二月と十四年二月に於て作品九二、九三として相繼いで演奏されて居る。この兩曲は共に皎日朝暉の勢よさと華やかさの特徴を備へ莊麗なる快活さに包まれて居る。前者には少しく強い影の搖曳を見るが、後者には些の陰翳さへない。然し第七が非常な喝乎を博したのに比して第八があまり受けないのを、彼は不思議に思ひ寧ろ不快に思つた。維納ではこの頃第六郎田園交響曲が大うけで第八などは存在しなかつたかの様に取扱はれて居たが、近代に至つてこの新作第八郎フモールの雅歌に、適當な名譽がよせらるゝに至つたとクレツチュマールは言明して居る。光彩突々たる夢幻的音畫であつてその終末の荒い反抗的な強い快活な調は彼の他の作に於て見られないものであるが、更に第八のフィナーレの如きは、彼のその昔の若さにかへつてハイドンの輕快を全面的に息づいて居て、晩年の彼によつて翻譯されたハイドンであると、これもクレツチュマールの評言である。この問題の年にこの二つの歡びの充ち溢れた二大曲がが作曲された事を如何に考ふべきかは、讀者諸君の賢察に任せたい。